

石神峠を行く

高木嘉吉

(会員・佐伯市藤原区)

石神峠は黒沢と三川内の境にある峠である。昔は一人やっと通れる兎道であったが、今は立派な林道が出来て車で往復出来る。石神峠に立って昔ここを去来した兵どもの夢の跡を偲ぶのも興味深いものがある。

兵の第一は佐伯惟治である。惟治の一行二十余名は臼杵長景の甘言を信じて柵牟礼を去り、黒沢で若狭と悲しく美しい物語を残して石神峠に達した。石神峠で前方を望むと、黒沢と三河内の分水嶺のおぼねが前方に伸び、その先に馬場の尾と称する平たい台地がある。ここで様子を見ようということで馬場の尾に移って過すことにした。時は陰暦十一月、陽暦では十二月だから南国でも寒さがこたえる。一行が寒さと飢に苦しんだ悲惨な様子は「大友興廃記」に詳しく記されている。惟治の一行はかくて止るべきにあらずと本口洞を経て三川内に出たが、

三河内人士の敵意を感じて再び山中に入り、尾高智に達して柵住居をしているところを三川内人士に襲われ悲惨な最後を遂げた。此のことを佐伯に伝えたのは泥谷将監であるが、将監も亦石神峠を通って佐伯に帰ったのであろう。

次に登場するのは佐伯惟定である。惟定は天正十四年十一月四日の堅田合戦大勝の余勢をかって、海路佐伯に來襲して略奪を繰返す三河内勢に一撃を加えんものと、代将高畑伊豫守に千五百余の兵を授けて三河内に向わせた。この佐伯勢は敵将甲斐宮内を打取り、城砦に火を放って引き上げた。尾高智から惟治の首を瀬口もたらした家臣も、野花で女装して危地を脱出した千束楽の人々もここを通ったことであろう。石神峠は佐伯氏にとって思いの深い所である。